

# ぼうさい

2023  
No.107

不屈の大地 Build Back Betterの軌跡

## 1923年関東大震災からの復興

大正12(1923)年・神奈川県

特集

## 関東大震災から100年②

～あの時その場所で何が起きていたのか～







## 大正12(1923)年・神奈川県 関東大震災からの復興

旧横浜市（現在の西区や中区を中心とした地域で面積は現市域の10%程度）は、関東大震災による死者・行方不明者が26,623人と、旧東京市に次いで被害が多かった地域です。全潰住家15,537棟、半壊住家12,542棟はいずれも旧東京市を上回っていることからその被害の大きさがわかります（数字はいずれも災害教訓の継承に関する専門調査会報告書より）。

復興に際しては、震災で発生した大量の瓦礫を処理しなければならず、その廃棄場所には横浜市山下町海岸通地先の海面が指定されました。この震災瓦礫による埋め立てを利用して、昭和5（1930）年に日本で最初の臨海都市公園として開設されたのが、山下公園です。山下公園は関東大震災の復興事業の一環として生まれた公園だったのです。

ホテル・ニューグランドに面する公園南側を正門として、噴水を中心に花壇が配置され、左右にはパーゴラが設けられました。さらに噴水奥の護岸には、海側に楕円形に張り出す形で石積みのバルコニーが設けられており、正門の門柱や正門から西側の外柵などとともに、



大棧橋から見た山下公園。マリントワーや氷川丸などと並んで横浜を代表する観光スポットになっている



開設当初の姿を残す山下公園

開設当時の姿を現在に伝えます。また周囲より一段低い「未来のパラ園」は、かつて船溜まりになっていた部分で、氷川丸の横にある小さな橋が名残をとどめます。

昭和10（1935）年には公園内にて「復興記念横浜大博覧会」が開催されているように、横浜における関東大震災からの復興の象徴となりました。その際に公園の目の前の海でクジラを泳がせたという逸話も残っています。

現在では多くの観光客が集まる横浜の名所である山下公園ですが、その足下に実は関東大震災で発生した瓦礫が埋まっているという事実を知る人は多くないかもしれません。関東大震災の発生から100年の今年、あらためて山下公園を訪れ、公園がそこにある意味に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



まだ工事中の山下公園（土木学会附属土木図書館提供）



旧版地図による震災前後の地図。水上警察署の位置は変わっていないので、震災後（右）には山下公園の部分が埋め立てられていることがよくわかる

現在は横浜スタジアムが建つ横浜公園は、関東大震災時に火災で焼き出された多くの人々が避難し、命をつないだ場所でもあります。東京では同じように多くの避難者が集まった被服廠跡地が火災旋風に巻き込まれ、悲劇の場所になったのに対して、横浜公園では周囲の樹木が火災旋風を防いだことに加え、避難民が燃えやすい家財道具を持たず、着のままで逃げたことも功を奏したとされています。



現在は横浜スタジアムが建つ横浜公園。多くの市民の命を救った場所でもある

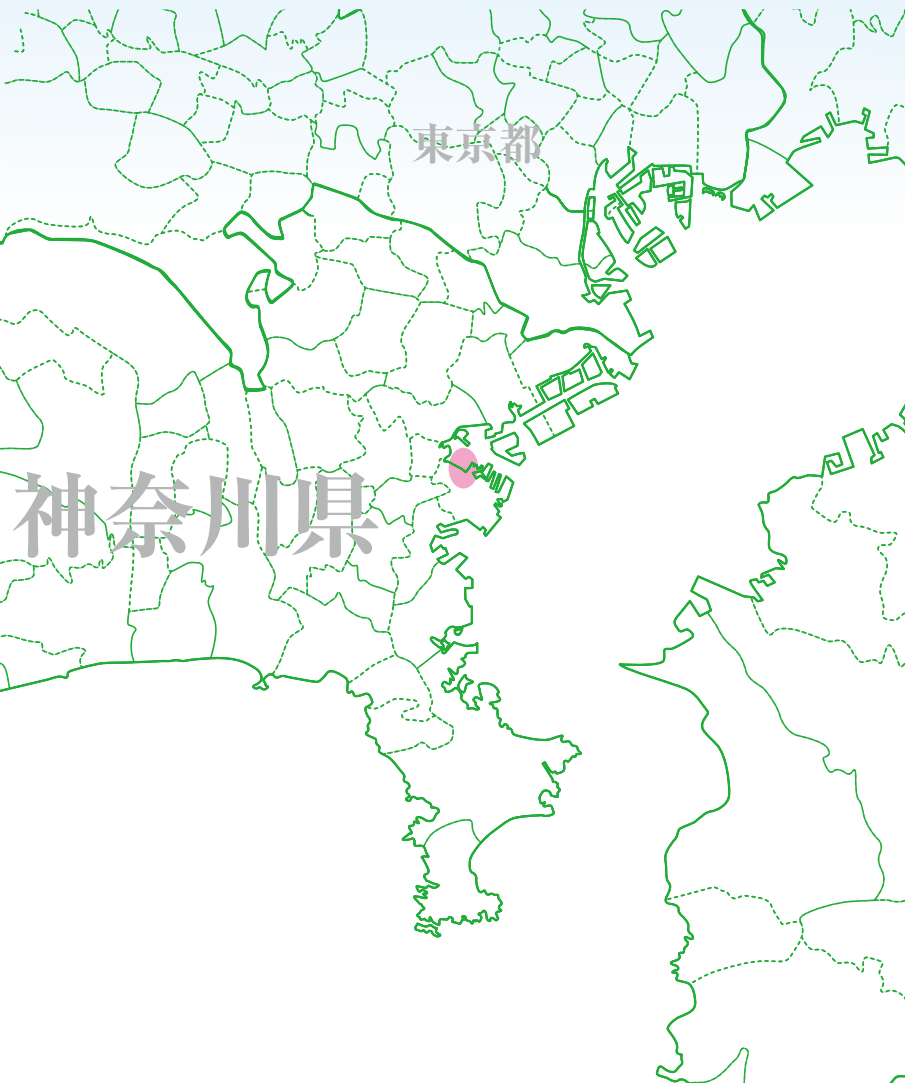
表紙写真

横浜の代表的な観光スポットである山下公園。周囲より一段低い「未来のバラ園」はかつて船溜まりになっていた部分で、氷川丸の横にある小さな橋が名残をとどめます。



Build Back Betterとは

「Build Back Better（より良い復興）」とは、2015年3月に宮城県仙台市で開催された「第3回国連防災世界会議」の成果文書である「仙台防災枠組」の中に示された、災害復興段階における抜本的な災害予防策を実施するための考え方です。本シリーズでは、災害が発生した国内外の事例を紹介し、過去の災害を機により良い街づくり、国土づくりを行った姿を紹介いたします。



CONTENTS

1 不屈の大地 Build Back Betterの軌跡  
関東大震災からの復興

大正12(1923)年・神奈川県

3 特集  
関東大震災から100年②

～あの時その場所で何が起きていたのか～

7 防災の動き

- ・仙台防災枠組中間レビュー・ハイレベル会合の概要について／内閣府防災（普及啓発・連携担当）… 7
- ・防災意識向上の普及・啓発に向けて～「地震防災対策の現状調査に係る住民向けアンケート調査」を実施～／内閣府防災（防災計画担当、調査・企画担当）… 10
- ・防災×テクノロジー官民連携プラットフォーム（防テクPF）マッチング体験してみませんか？／内閣府防災（防災計画担当）… 11
- ・津波警報等の視覚による伝達「津波フラッグ」／気象庁地震火山部… 12
- ・キキクル、噴火警報・噴火速報のプッシュ型通知サービスについて／気象庁総務部… 13
- ・「持続可能な地域づくりのための生態系を活用した防災・減災（Eco-DRR）の手引き」の公表について／環境省自然環境局… 14
- ・「災害時における石綿飛散防止に係る取扱いマニュアル」の改訂について／環境省水・大気環境局… 15
- ・富士山ハザードマップ（HM）改定に伴う御殿場市の取り組みについて／静岡県御殿場市… 16
- ・関東大震災発生100年を契機とした地震防災・減災の取組み／神奈川県くらし安全防災局… 19
- ・小田原市【関東大震災100年事業】／神奈川県小田原市… 20
- ・～「防災」に「楽しい」や「美味しい」をプラス～いたばし防災+（プラス）プロジェクト／東京都板橋区… 21
- ・未来の消防団員へ地域防災教育及び加入促進～消防団と小学校が最強タッグ～／兵庫県福崎町消防団… 22
- ・スマホで5分！簡単訓練！～避難訓練OnLINE～／大阪府藤井寺市… 23
- ・まんがやアニメで防災を楽しく学ぶ！／高知県危機管理部… 24
- ・熊本県防災センターが完成／熊本県知事公室… 25

26 防災リーダーと地域の輪 第51回

12の町会が一体となって目指す

「災害に自立できる強い里づくり」

京都市 大原自治連合会大原自主防災会



# 関東大震災から100年②

## ～あの時その場所で何が起きていたのか～

令和5(2023)年は、大正12(1923)年に関東大震災(大正関東地震)が発生してから100年という節目の年です。関東大震災の10万5,000人の犠牲者のうち9割が焼死であったことからわかるように、被害を大きくしたのは同時多発的に発生した火災と、炎がもたらす火災旋風でした。本特集では当時東京や横浜に甚大な被害をもたらした火災を中心に、「あの時その場所で何があったのか」を振り返ります。

※火災以外の被害については「ぼうさい」106号をご覧ください。



吉田初三郎「関東震災全地域鳥瞰圖繪」国際日本文化研究センター所蔵

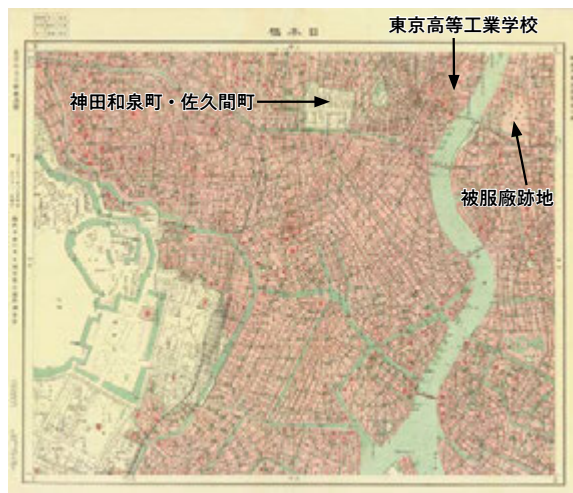
### 不運だった当日の気象条件

江戸時代に幾度となく大火に襲われた江戸の町ですが、明治維新以降は銀座レンガ街の建設をはじめ、東京防火令の公布や都市計画法・市街地建築物法の施行などもあり、大きな火災は減少していました。また関東大震災当時の警視庁消防部は、最新技術を活用する消防組織となっていました。それでも同時多発的な火災と、地震による断水は想定されておらず、結果的被害を食い止めることができませんでした。

東京市(当時)の火災は9月1日11時58分の地震発生直後から発生し、延焼しながら9月3日午前10時に鎮火するまで46時間にわたって続きました。全出火点134か所のうち即時消し止められたのが57か所で、消し残った77か所が延焼火災となり、市域全面積の43.6%にあたる34.7km<sup>2</sup>を焼き、多くの犠牲者を出すこととなりました。特に不運だったのが当日の気象条件でした。日本海には弱い台風があったことから、火災が発生した時間帯には風速10mを越える強い風が吹いており、しかも南風から西風、北風、再び南風と風向きが変わり続けたことが延焼範囲を拡大し、避難者の逃げ惑いを生じさせてしまったのです。

### 悲劇の現場となった被服廠跡地

両国駅の北に位置する現在の横網町公園はもともと陸軍被服本廠があった土地ですが、関東大震災前年の大正11(1922)年に赤羽に移転したことから、広い空き地となっていました。火災で焼け出された多くの人々が、安全とされていたこの被服廠跡地に避難してきていました。広い空間ではあるものの、この時点で被服廠跡地は四方を火災域に囲まれており、既に逃げ場のない状態になっていました。



東京市火災動態地図「日本橋」(内閣府)





被服廠跡地を襲う火災旋風の火元となった東京高等工業学校の被害の様子（土木学会附属土木図書館提供）と現在の学校跡地の様子。火災旋風は広い隅田川を越えてやってきた

そこへ火災旋風が襲います。北側、東側、南側から次々と火の手が迫ってきたことに加えて、隅田川の対岸にあった東京高等工業学校を火元とする大規模な火災域から発生した火災旋風が、川を越えて西側から襲ってきたことで、被服廠跡地も炎に包まれることとなってしまいました。

さらに被害を大きくしたのが、避難者たちが持ち込んだ家財道具などの可燃物でした。飛び火や火の粉で着火し、折からの強風や火災旋風によりあっという間に被服廠跡地は火の海になってしまいます。また、旋風は人や荷車、屋根瓦、トタン板、石やレンガも空中に巻き上げたという証言もあり、旋風そのものも犠牲者を増やしたと考えられます。

被服廠跡地では約3万8,000人も命が奪われました。周辺で亡くなり被服廠跡地に運び込まれた人も含め、最終的に約4万人の遺体がこの場所で火葬されました。昭和5（1930）年には同地に横網町公園が開園し、震災慰霊堂が建てられて遺骨が収容されています。また翌年には関東大震災とその復興を後世に伝えるための復興記念館が完成しました。

その後第二次世界大戦の空襲により周囲は再び焦土と化します。その後戦災による身元不明の遺骨を合祀する形で慰霊堂は「東京都慰霊堂」と改称され、復興記念館とともに当時の悲劇を現在に伝えています。



横網町公園に建つ東京慰霊堂と東京都復興記念館

### 奇跡的に延焼を逃れた神田和泉町・佐久間町

こうした広域の延焼を奇跡的に食い止めた地域があります。火災動態地図で延焼地域の中で島のように空白域となっている神田和泉町・佐久間町です。この地域が延焼を免れたのは住民たちの必死の消火活動もさることながら、西側に秋葉原貨物駅、南側に神田川があり、北側と東側は不燃建物に囲まれており木造密集市街地と接していなかったこと、そして震災前年に完成したポンプ所の存在など、いくつかの好条件が重なったことも幸運でした。

震災の記憶をとどめていた旧和泉町ポンプ所は2017年にその役目を終え、奇しくも震災から100年目の2023年、解体されることとなりました。



写真上：一角だけ焼け残る奇跡をもたらした旧和泉町ポンプ場。1922年完成当時の姿（土木学会附属土木図書館提供）と解体工事に入った2023年6月現在の様子  
写真右：神田和泉町に建てられた「防火守護地」の碑





## 多くの命を救った横浜公園

震源に近い横浜市では東京市以上に被害は大きく、住家全壊棟数は約1万6,000棟と人口が5倍だった東京の約1万2,000棟を上回っています。



横浜市火災延焼状況図 (内閣府)



関東大震災後の横浜市馬車道付近の様子・左奥に見えるドームは横浜正金銀行 (土木学会附属土木図書館提供)



関東大震災後の横浜市中心部の様子

火災は東京同様に同時多発的に発生しました。出火地点は市街地に集中しており、焼失面積およそ10km<sup>2</sup>の中に177カ所もあることから、多くの人が逃げ場を失う形で、空き地や橋などで焼死したケースが多く見られました。

一方で焼失地区内に位置している横浜公園には約6万人



現在の神奈川県立歴史博物館

の避難者が集まり、53名が死亡したものの、公園内の樹木や水道管の破裂により水があったことが延焼を防ぎ、多くの人が助かりました。東京の被服廠跡地のケースと異なり、周囲の火の回りが早かったことから避難民が家財道具を持ち出せず、着の身着のまま避難してきたことも幸いしたとされています。

また横浜正金銀行本店 (現在の神奈川県立歴史博物館) は地下1階、地上3階のレンガ及び石造りであり、窓などの開口部には鉄扉が取り付けられていたことから、行員や避難者340人を行内へ入れ、地下室に籠城し、炊事場の汲み置きの水を飲むことができたことで、全員が生き残りました。

## 震災後の救済

震災発生翌日、政府は戒厳令の適用、非常徴発令の発令を決定したものの、対応の本格化は3日の朝からでした。東京府と東京市では庁舎構内にテント張りの非常災害救護事務所を開設して対応にあたりました。大規模避難所となった公園での救護活動も開始しました。

日比谷公園では堀井戸全部に応急処置を施して、避難者



関東大震災から100年② ~あの時その場所で何が起きていたのか~

に終夜給水を行ったほか、芝公園では、陸軍より支給の乾パン1万6,000人分、同公園水泳場の水槽内の水約8,000石が避難者に分配されました。その後日比谷公園、上野公園などでも炊き出しが広がっていきます。

食糧・水の配給に続いて重要なのは避難民の収容です。第一次的な方法として、学校、官公衙、社寺境内や華族、富豪などの大邸宅が開放され、陸軍や民間から借り入れた天幕を収容所に充てることも行われました。こうした動きは大規模避難場所へも広がっていきました。

その一方で、公的な避難所だけでは収容力に限界がありました。そこで第二次的な方法として、小学校の焼け跡や公園など、あちらこちらでバラック収容所が建設されていきました。



震災後のバラックが建ち並ぶ靖国神社境内（東京市「THE RECONSTRUCTION OF TOKYO」より）と現在の靖国神社参道

## 郊外への影響

東京では火災旋風から逃れようと隅田川に飛び込んで水死した人も多数いました。震災から数日後には、品川町から大井町にかけての海岸に多数の水死者が流れ着きました。こうした遺体は両町で順次火葬され、後に横網町公園の慰霊堂に合葬されています。南品川海蔵寺や、鈴ヶ森の大経寺には、関東大震災時に海岸に流れ着いた死者のための供養塔が建立され、現在も残ります。

また関東大震災をきっかけに、当時の郊外部には多くの人たちが流入し、発展を遂げることになりました。震災前の段階で東京市の人口は飽和状態にあり、多くの被災者が郊外へ生活の拠点を求めたことから、隣接する北豊島、南足立、南葛飾、荏原、豊多摩の郡町村の人口が爆発的に増加しています。

現在の埼玉県さいたま市北区に盆栽町という町があります。東京小石川周辺で盆栽業を営んでいた人たちが関東大震災で被災したことを機に、煙や煤などで汚染された都心を離れ、盆栽栽培に適した土や、清涼な水・空気のある広い土地を求めてこの地区に集団移転してきたことで「大宮盆栽村」が形成されたのです。その後盆栽は大宮市（現さいたま市）の地場産業として定着し、平成20（2008）年にはさいたま市の伝統産業に指定されるに至っています。



南品川海蔵寺に残る関東大震災時に海岸に流れ着いた死者のための供養塔



さいたま市北区にある大宮盆栽村。関東大震災をきっかけに盆栽はさいたま市の地場産業として定着することとなった

ご紹介した例はほんの一部であり、関東大震災の遺構や供養塔等の石碑は首都圏を中心に多く残されているほか、郷土資料館等でも関連資料を見ることが可能です。また発災から100年の本年は、さまざまな行事も予定されています。この機会に是非、関東大震災を振り返り、日頃の備えに生かしていただければ幸いです。

### 「関東大震災100年」特設ページについて

内閣府防災担当では、関東大震災100年特設ページを開設し、関東大震災の関連資料や報告書等を掲載するとともに、行政機関や各種団体等による関東大震災100年関連行事の予定等を集約・発信しています。

関東大震災100年の共通ロゴマークも設定していますので、関連する行事等において広く使用いただければと思います。

特設ページ



関東大震災100年 共通ロゴマーク  
(左記、特設ページから取得することができます)

<https://www.bousai.go.jp/kantou100/index.html>